

冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念の変容

飯田 稔・井村 仁・影山 義光

The Effects of Adventure Camp upon Anxiety and Self-Concept in Elementary School Children

Minoru IIDA, Hitoshi IMURA*, Norimitsu KAGEYAMA

The purpose of this study was to examine the effects of anxiety and self-concept in elementary school children who participated in a 7-day adventure camp conducted in 1986. Subjects were 44 male and female fourth to fifth graders. The adventure camp put great stress upon overnight solo and mountain climbing in addition to a variety of camp activities.

The anxiety of participants was measured with STAIC (State-Trait Anxiety Inventory for Children), which was developed by Soga and STAIC was administered five times before, during and after camp. This study investigated only state anxiety (A-State). To measure the self-concept the Self-Enhancement Scale was administered in a pre- and post-design.

The following results were obtained.

1. The adventure camp participants showed the highest anxiety in solo situation and next in mountain climbing situation.
2. No significant difference between boys and girls was found in anxiety in any situation.
3. Participants in adventure camp, as a whole, tended to improve overall self-concept and showed significantly positive change in the category of achievement motivation, particularly for girls.

Key words: Adventure, Camp, Anxiety, Self-Concept, Children

アメリカにおいては、1960年代後半から、自然環境を利用して行なわれる冒険的活動に対する関心が特に教育やレクリエーションの分野で急速に高まり、現在多くのプログラムが開発、提供されている。これらの冒険的活動は、Adventure Education, Risk Recreation, Survival Training等様々な名称で呼ばれている。

1930～1980年までの50年間に、宿泊型野外教育 (Resident Outdoor Education) がアメリカの教育に与えた影響を概説した Hammerman⁷⁾は、70年代の動向の一つとして、環境教育、特殊教育と

並んで冒険教育をあげている。70年代に入ってから冒険プログラムの効果に関する研究が増加し、それらの成果をまとめたレビューが数多く発表された。(例えば Godfrey⁵⁾; Iida⁸⁾; Shore¹⁸⁾) 冒険プログラムは、ユダヤ系ドイツ人教育者、Kurt-Hahnが第二次大戦中イギリスで創設した Outward Bound Schoolの理念と方法が基盤になっている。Outward Bound Schoolの特徴は、21～26日間の長期滞在、対象として高校生以上の男女青少年、自然を利用した冒険的野外活動、目的としての自己発見と性格育成である。また、プログラムの展開にあたっては、1) 体力作り・基礎実技、2) グループ別実技実習、3) ソロ (Solo) と呼ばれる個人活動、4) 評価の4段階からなり、

* 国際武道大学

困難な課題を段階的に解決させ、成功体験を与えるという方法が基本になっている。

初期の研究は、Outward Bound School についてのものが大部分であったが、その後、Outward Bound School のプログラムを一部修正または応用したプログラム (Modified Outward Bound Programs) が実践されるにつれて、これらのプログラム効果に関する研究が多く発表されている。

冒険プログラムの参加者に及ぼす効果に関する研究の多くは、自己理論の枠組み (A framework of self-theory) の中で展開されており、特に自己概念の向上が中心となっている。この理論によれば、自己の維持、向上は人間の基本的欲求の一つであり、人間の行動は自己に対して持っている個人の意識によって影響される。すなわち、自己概念は人間の行動を決定する大きな要因となる。さらに自己概念の変容は個人にとって重要で、意味のある新しい体験によって個人及び外界との接触を通じて起こると考えられている⁶⁾。

冒険教育プログラムの研究は、自然環境の中で危険をとまなうような冒険的野外活動を通じて、様々な困難やストレスを体験し、ストレスを克服することによって成功体験を味わい、成功体験の蓄積により自己概念の向上がもたらされるという前提にたっている。

したがって、野外活動プログラムが含んでいる危険性とそれに対する個人的反応としてのストレスが、自己概念の変容にとって重要な要因となる。

ストレス理論を医学的観点から確立したのは、Seleye¹⁷⁾であるが、ストレスは不安と密接な関係があり、心理学では明確に区別されていないように思われる。例えば Spielberger²⁰⁾は、不安状態を喚起するような状況の様々な面を示すものとしてストレスとか脅威という用語を用いており、同様に、Levitt¹⁴⁾はストレスあるいはストレスに満ちた状況とは、個体に不安を引き起こすことが予想される刺激あるいは条件を含んでいる状況であると定義している。さらに、しばしば経験されるストレスの状況は、状態不安を減少させる特殊な処理反応や心理学的な防衛機制を発展させる役割を果たすと述べている。

冒険プログラムと不安との関連について検討した研究はあまり多くない。冒険プログラムのストレスまたは、ストレスの状況を測定するために、Koepeke¹³⁾、Chesnutt¹⁾は STAI を用いて、また

Thornstenson, Heaps & Snow²²⁾は MAS を用いて参加者の不安の変容について報告している。Davis²⁾、McHattie¹⁵⁾、Ewert⁴⁾は冒険プログラムにおける恐怖 (fear) の分析を行っており、これらは一種の状況不安 (a situational anxiety) としてとらえることができる。

冒険プログラム経験が自己概念の変容に及ぼす効果については多くの研究がなされており、Ewert³⁾はこれらに関する1982年までの50余りの先行研究を分析した結果、その大部分は参加者の自己概念の向上に効果があったことを報告している。しかし、これらの研究対象は、いずれも16~20才代前半の者に限られており、小中学生だけを対象にしたものは、ほとんどみられなかった。Rosenburg¹⁶⁾は自己概念の変容の critical period に関して、8~11才の子どもと12~13才の子どもの自己概念の間にはほとんど常に大きな差があり、満12才の時期に最も顕著な変容がみられると指摘している。

小中学生を対象に、冒険プログラムが参加者の不安と自己概念に及ぼす影響に関する研究として、井村¹⁰⁾、Iida, Imura & van der Smissen⁹⁾の研究がある。

井村¹⁰⁾は中学生の冒険キャンプの参加者、一般的なキャンプ参加者、キャンプ非参加者の3群について自己記述尺度 (Self-Differential Scale) を用いて自己概念の変容を比較したところ、冒険キャンプ参加者はその他の群よりキャンプ直後に自己概念が向上する傾向がみられ、その傾向は女子に顕著だったと報告している。また STAI を用いて測定した不安では、冒険キャンプ参加者のうち、キャンプ中強いストレス経験をした者は、ストレス経験が低かった者に比べて自己概念が向上する傾向が認められた。

Iida⁹⁾らの結果によれば、小学校6年生から中学校2年生までの男女155人を対象に自己成長性検査を用いて測定したところ、冒険キャンプ経験は参加者の自己概念、特に達成動機と努力主義を向上させるうえで効果があり女子により顕著な効果が認められた。STAI および APAS (Adventure Program Anxiety Scale) を使った不安に関しては、サバイバルを含む山中泊の登山に対して高い状態不安と状況不安が示され、心理的ストレスの要因となっていた。また不安の性差がみられ、女子が男子よりも高い不安を示した。さらに高不安

群は低不安群に比べて努力主義に関する自己概念の向上に効果がみられた。

本研究は、高度のストレスを与えると考えられる、一人だけで山中で一夜を明かすソロを導入した冒険キャンプが、小学校4・5年の参加児童の不安と自己概念に及ぼす影響を明らかにすることによって、冒険キャンプの今後のあり方についての示唆を得ることを目的としている。

方 法

被験者

昭和61年8月に実施した幼少年キャンプ研究会主催の冒険キャンプに参加した小学生44名で、学年、男女の内訳は表1に示す通りである。被験者は筑波研究学園都市に居住し、キャンプに自主的に参加し、健康上キャンプ生活に支障がないと認められる者に限られた。

表1 被験者の学年と性別

	男 子	女 子	
4 年	18	5	23
5 年	11	10	21
合 計	29	15	44

冒険キャンプの概要

キャンプは6泊7日の日程で、宮城県栗原郡花山村にある同研究会所有の花山キャンプ場で実施された。キャンプ生活は、テントで寝袋を使用して宿泊し、自炊による原始的キャンプの形式で行なわれた。大学教官、医師と看護婦を含む合計16名のスタッフがキャンプの指導と運営にあたった。グループ編成は、キャンパー7～8名からなる男女学年混合グループからなり各グループに1名のカウンセラーがキャンパーの指導にあたった。

キャンプに先だって、7月中旬に1泊2日の予備キャンプを筑波大学構内野外実習場で行なった。本キャンプでの主要な活動は、表2に示すように、設営・環境整備、林業プログラム、登山、選択プログラム、夕食コンテスト、ソロ、パーティー、キャンプファイヤー、撤収で構成されている。

ここでは、本研究に深い関連があると思われる登山とソロについて説明する。栗駒山登山は、登

りが沢登りを含む高度差550m、歩行距離5km、下りは高度差880m、歩行距離8kmの行程で休憩を含めた所要時間は約7時間であった。冒険キャンプのメインプログラムであるソロは7月下旬に小学校4・5年生男女37名を対象に行なった予備実験の結果から、次の条件を設定し実施した。

- 1) 時間は午後3時～4時にキャンプ場を出発し、カウンセラーが前もって決められた場所にキャンパーを配置し、翌朝の9時～10時に現地へ迎えに行くまでの約18時間。
- 2) 現地に配置されるまでの車中は目隠しをし、道路から最低100m離れた山林の中に配置する。
- 3) キャンパー同志の位置は300～500m離し、お互いに見えないところで、定位置から半径50mを行動範囲とする。
- 4) 食事は夕食と朝食分として一人当たりカロリーメイト2箱(各290g)と水500ccに制限する。
- 5) 宿泊は2メートル四方のナイロンシートとロープでシェルターをつくり、寝袋を使って寝る。
- 6) 時計・本類は持って行かない。
- 7) もし参加をいやがるキャンパーがいたら無理に参加させることはしない。

以上の条件をキャンパーに説明した。安全管理については、現地事前調査に加えて、カウンセラーが一定地域のキャンパーを把握することとし、日没後キャンパーに気づかれないように巡回し、キャンパーの安全を確認した。

検査および手続

1. 不安

Spilberger²¹⁾らの開発したState-Trait Anxiety Inventory for Childrenを日本語版に標準化した曾我の児童用状態-特性不安目録(STAIC)のうち、状態不安尺度(A-State)を用いて場面ごとのキャンパーの不安を測定した。A-Stateは20項目からなり、3段階評価によって測定するものである。これは、キャンプ開始1週間前、登山出発前夜、ソロ出発直前、ソロ帰着直後、キャンプ終了45日後の計5回実施した。

2. 自己概念

キャンプ前後における参加者の自己概念の変容をみるために、梶田^{11,12)}が作成した自己成長性検査を採用し、得点化にあたっては、「まったく自分に当てはまる」を5点とし、「まったく自分に当て

表2 キャンプ・プログラム

	第一日 8月22日	第二日 8月23日	第三日 8月24日	第四日 8月25日	第五日 8月26日	第六日 8月27日	第七日 8月28日
4							
5			00起床			ソ	
6		00起床 30朝のつどい	朝食・登山準備	00起床 30朝のつどい	00起床 30朝のつどい	ロ	00起床 30朝のつどい
7		朝食	00バス出発	朝食	00自由活動		朝食
8	00集合 16駅発		20登山発				
9		30林業プログラム	20沢登り	30選択プログラム			00自由活動
10	28上野駅着 00上野駅発 東北新幹線		10雪渓	30選択プログラム 自然工作 金山探訪 小屋づくり		00キャンプ帰着	
11			35栗駒山山頂 (昼食)				30キャンプ場発
12	(昼食) 20古川駅着	(昼食)		昼食	昼食	昼食	
13	45キャンプ場着	00自由活動		30自由活動		00撤収	14古川駅発 東北新幹線
14			35湯浜温泉着		30ソロ活動出発		
15	30開村式 00設営						34上野駅着
16	夕食	夕食			一人で夕食		45解散
17					ビバーク	バーベキュー パーティー	
18				00夕食コンテスト			
19	00班別活動	00班別活動			ソ		
20		(夕食コンテスト メニュー作り)				30キャンプ ファイアー	
21	30消灯	30消灯	30消灯	00消灯			
22						00消灯	

はまらない」を1点とする5段階評定に修正し実施した。この検査は、自己形成及び自己実現に関する態度や意欲を測定するもので、31項目、達成動機、努力主義、自信と自己受容、他者のまなざしの意識の4因子から構成されている。自己成長性検査はキャンプ開始1週間とキャンプ終了45日後の2回実施した。

3. ソロ不安調査

この他にソロ場面における不安の状況を知るた

めに、補足資料として筆者が作成した18項目のソロ不安調査をソロ直後に実施した。

結果と考察

1. 不安

5つの場面ごとの状態不安得点を表3に示した。ソロ前(M=38.2)の不安が最も高く、次に登山前(M=32.6)、ソロ後(M=30.7)、キャンプ前(M=30.3)が続き、キャンプ後(M=27.7)

の不安が最も低かった。キャンプ前の不安得点を基準にして、その他の場面の不安得点との差をt検定を用いて検定した結果、ソロ後との間には有意な差はみられなかった。登山前とソロ前の不安は有意に上昇し、逆にキャンプ後の不安は有意に低下した。また、登山前とソロ前には0.1%の水準で有意差が認められ、(t=5.78, df=43, p<.001) ソロは登山よりも強いストレス場面であった。したがって、ソロと登山を中心にしたキャンプ・プログラムはストレス的状况を特徴とする冒険キャンプとして妥当なものであったと考えられる。

表3 状態不安得点の比較

	M	SD	t
キャンプ前	30.3	6.64	
登山前	32.6	6.90	2.58**
ソロ前	38.2	8.88	5.78***
ソロ後	30.7	8.68	0.02
キャンプ後	27.7	7.20	2.96**

**P<

***P<.001

Iida⁹⁾らが小学校6年生を対象に行なったソロを含む登山の状態不安得点(M=33.1)と比較してみると、本実験のソロに対する不安は著しく高く、登山前の不安はほぼ同程度のものではあった。先の研究のソロ場面では、仲間やカウンセラーが10~30mの範囲にいたが、今回は他の人の全くいない、完全に孤立した状況で行なわれたことが強く影響しているものと推察される。

また、今回の被験者が小学生4・5年生と学年が低かったことも一因と考えられる。

曾我¹⁰⁾の研究によれば、小学校4~6年生を対象にしたSTAICの状態不安得点は、ノーマル状況で男子M=32.8、女子M=35.5であった。この結果を本研究のキャンプ後の状態不安得点(男子M=28.0、女子M=27.3)と比べると、本研究の被験者の不安は著しく低かった。また、不安の性差については、すべての場面において有意差は認められず、男子よりも女子の方が高い不安を示すという従来の研究結果を支持するものではなかった。Iida⁹⁾らの結果では、6年生では有意性傾向があり、中学生では有意差が認められた。このことから考えると、不安の性差は小学校6年生頃から始まることが示唆されるが、この点については今

後さらに検討する必要がある。

本研究では、ソロ場面の不安測定をソロ出発直前にキャンプ場で行なったが、ソロの場所に到着し、一人だけになった直後に測定していたらより正確な状態不安のデータが収集できたものと思われる。何故なら、被験者の感想文や会話から、上記の状況において最も不安が高く、危機的であったことが推測された。

ソロにおいて最も高い不安がみられたが、ソロ期間中の参加者の不安状況を知るために、ソロ不安調査を行なった。各項目について「よくあてはまる」または「あてはまる」と回答した件数を%で示し、不安の高い項目順に示したものが表4である。その結果をまとめてみると、第1に時計をもっていないために正確な時間がわからず、時間の経過に対する焦燥感がみられた。(項目: 8, 18, 3, 11) 第2に孤独感から、仲間のキャンパーや家族のことを思い出した。(項目: 9, 15, 14) 第3に、自然の脅威に対して極度に敏感になり、危機感をもった。(項目: 10, 13) 第4は、不安の際に一般的にみられる生理的徴候があった。(項目: 2, 1, 6, 5, 7, 16)

表4 ソロ不安調査^a

順位	項目	%
1	8) いま何時なのか気になった	79.1
2	9) 話相手や遊び相手がほしかった	74.4
3	18) カウンセラーがむかえに来るのがまちどおしかった	69.8
3	3) 早く朝が来てほしいと思った	69.8
5	10) クマやヘビがでてくるのではないかと思った	67.4
6	13) ちょっとした物音でも気になった	58.1
7	15) ほかのキャンパーがどうしているか気になった	53.5
8	14) 自分の家や家族のことを思いだした	48.8
9	11) なにをしたらよいかとまどった	39.5
10	2) じゅくすいできなかった	34.9
10	1) なかなか寝つけなかった	34.9
12	6) おなかがすいてたまらなかった	32.6
13	5) とてものどがかわいた	23.3
14	7) いつもよりトイレに多くいった	20.9
14	16) なみだがでた	20.9
16	17) どうしてソロをするのか疑問に思った	14.0
16	4) いやな夢を見た	14.0
18	12) ヘッドランプをつけっぱなしにしてねた	7.0

^a 1名の回答が不完全であったため削除しN=43

Wiland²³⁾は、中学生(13~15才)を対象に2泊3日にわたる計50時間のソロと62時間の断食を含む事例研究を公表している。その結果、ソロで最も苦しかったことは、飢えよりも退屈、自然の条件、そして孤独であったと報告している。年齢とソロの条件の違いはあるが、この結果は本研究のそれと類似している。退屈のぎに子供たちがやったことの中には、メモ帳に絵をかいたり樹木を写生する、歌をうたう、クラフトで作ったパチンコで木や葉っぱを打つ、ナイフで枝を削るなどが今回の被験者の感想文にみられた。

2. 自己概念

参加者の自己概念の変容をみるために、キャンプ前後における自己概念得点の平均についてt検定を行なった。その結果、表5に示す通り全体および女子に自己概念の向上がみられたが、有意差には達せず、有意性傾向がみられた。

次に4つの因子ごとにキャンプ前後の変化をみ

表5 キャンプ前後の自己概念得点の比較

		キャンプ前		キャンプ後		t
		M	SD	M	SD	
自己概念						
男	子	109.6	13.89	112.1	13.50	1.08
女	子	111.1	14.48	115.5	18.13	1.77 ^x
全	体	110.2	13.95	113.3	15.15	1.82 ^x
達成動機						
男	子	29.2	3.97	30.1	3.44	1.09
女	子	27.5	4.60	30.1	5.03	3.08 ^{**}
全	体	28.6	4.22	30.1	3.90	2.39 [*]
努力主義						
男	子	31.9	5.24	31.5	4.68	0.55
女	子	35.0	4.50	34.5	4.70	0.67
全	体	33.0	5.17	32.5	4.86	0.78
自信と自己受容						
男	子	23.5	4.53	24.1	4.65	0.61
女	子	23.1	4.92	24.8	6.13	1.93 ^x
全	体	23.4	4.62	24.3	5.14	1.40
他者のまなざし						
男	子	24.9	4.62	26.4	5.04	1.73 ^x
女	子	25.6	4.22	26.1	5.13	0.57
全	体	25.1	4.45	26.3	5.02	1.81 ^x

^xp<.10 *p<.05 **p<.01

ると、達成動機に関しては全体(t=2.39, df=43, p<.05), および女子(t=3.08, df=14, p<.01)に有意な向上が認められた。自信と自己受容に関しては女子に向上の傾向がみられ、他者のまなざ

しの意識では全体と男子に向上の傾向がみられた。以上の結果、冒険キャンプ経験は参加児童の自己概念を高める傾向があり、特に「自分の能力を最大限に伸ばせるようないろいろなことをやってみたい」、「他の人にはやれないようなことをやってみたい」などに代表されるような達成動機に関わる自己概念を向上させるのに効果がみられた。これらは、いずれも女子により顕著であった。自己概念と達成動機についてのこれらの結果は、Iida⁹⁾の研究結果と一致している。また「勉強や運動に自信を持っている方である」、「自分を頼りないと思う(逆転項目)」といった内容を含む自信と自己受容についても女子に向上の傾向がみられた。このように冒険プログラム経験が男子より女子の自己概念の向上により効果があることは井村¹⁰⁾によっても実証されている。その理由として、性別に対する社会通念から女子は男子に比べて家庭や室内における静的な活動が強調され、野外での活発な運動やストレス経験が少ないことがあげられる。しかしながら、冒険キャンプを通じてこれらの活動に参加し、男子と同じことを成就することにより、自信と意欲が高まるものと考えられる。努力主義の因子に関しては、男女とも有意な向上は認められなかった。

不安と自己概念の結果から、ソロと登山を中心とする冒険プログラムが参加児童に強いストレスを与えたことは確かだが、与えられたストレスを参加者が積極的に克服できたかどうかについては、状態不安とソロ不安調査を分析した結果からみて疑問が残る。逆にいえばストレスが強すぎたのではないかと推測される。キャンプ終了45日後に行ったアンケート調査のうち、「ソロをもう一度やってみたいと思いますか?」の設問に対して、「とてもやってみたい」または「やってみたい」(17.1%)「どちらともいえない」(37.2%)「あまりやりたくない」または「ぜったいやりたくない」(45.7%)の回答があった。このことから、ソロは参加児童にとって厳しすぎたことは、明らかである。自己概念に関しても、向上はみられたが、期待していた程のレベルではなく、むしろIida⁹⁾らの前回の成果よりも低いものであった。このことから参加者に対するストレスが高ければ高いほど、自己概念の向上に効果があるとは言えないのではなかろうか。参加者の発達段階に適したストレスの程度を把握しプログラム化するとともに

に、参加者がストレスに積極的に対処し、それを克服するための指導方法の確立が急務であることを示唆しているように思える。

結 論

小学校4・5年生44名を対象に、7日間の冒険キャンプを実施し、参加児童の不安と自己概念の変容について分析した結果、次の結論を得た。

1. ソロと登山を中心としたキャンプ・プログラムは、参加児童に強いストレスを与え、冒険キャンプとしての妥当性が検証された。
2. 冒険キャンプ参加児童の不安に関しては、性差はみられず、女子の不安が男子より高いとは言えない。
3. 冒険キャンプ経験は参加児童の自己概念を向上させる傾向があり、特に女子の達成動機に関して顕著な向上が認められた。
4. 冒険キャンプの指導運営にあたっては、参加児童の発達段階を考慮する必要性が示唆された。

今後の課題として、1) 発達段階と至適ストレス、2) 冒険プログラムのマイナス効果、3) 様々な冒険プログラムによる効果の違い、について研究する必要がある。

引 用 文 献

- 1) Chesnutt, T.J., The effects of a three week adventure-oriented program and a five week leadership experience program upon the self-concepts of counselors-in-training. Doctoral dissertation, University of Georgia, 1980.
- 2) Davis, R.W., The fear experience in rock climbing and its influence upon future self-actualization. Doctoral dissertation, University of Southern California, 1972.
- 3) Ewert, A., Outdoor adventure and self-concept: A research analysis, University Oregon, 1982.
- 4) Ewert, A., The therapeutic modification of fear through outdoor recreation activities. *The Bradford Papers Annual*, 1, 1-10.
- 5) Godfrey, R.J., A review of research and evaluation literature on Outward Bound and related educational programs. Paper presented at the Conference on Experiential Education, Estes Park, Colorado, 1974.
- 6) Fitts, W., The self concept and self actualization. Nashville, Tenn; The Dale Wallace, Center, 1971.
- 7) Hammerman, W.M., Fifty years of resident outdoor education: 1930-1980. Martinsville, Indiana: The American Camping Assosiation, 1980.
- 8) Iida, M., Adventure-oriented programs-A review of research. In B. van der Smissen (ed.), Research camping and environmental education. The Pennsylvania State University, 1975, 219-241.
- 9) Iida, M., Imura, H., & van der Smissen, B., The impact of short-term adventure camp on self-concept and anxiety in Japanese early adolescents. 筑波大学体育科学系紀要 1986, 9, 91-101.
- 10) 井村 仁, 冒険キャンプ経験が中学生に及ぼす心理的影響に関する研究—特に自己概念, 不安を中心として, 筑波大学体育研究科修士論文, 1979.
- 11) 梶田 勲一, 青少年の内面的成熟過程に関する検討—自己成長性の発達状況をめぐって, 教育の成果分析研究会編, 青年の内面的成熟に関する研究, 1975, pp. 7-37.
- 12) 梶田 勲一, 自己意識の心理学. 東京大学出版会, 1980.
- 13) Koepke, S., The effect of Outward Bound participation upon anxiety and self-concept. Master's thesis, Pennsylvania State University, 1973.
- 14) Levin, E.E., (西川好夫訳) 不安の心理学. 法政大学出版社, 1976.
- 15) McHattie, G.S., A descriptive analysis of selected teacher/student behaviors during adventure activity-The program of outdoor pueuits. Doctoral dissertation, The Ohio State University, 1978.
- 16) Rosenburg, M., Conceiving the Self. New York: Basic Books, Inc., 1979.
- 17) Seleye, H., The Stress of life. New York: McGraw-Hill Book Co., 1956.
- 18) Shore, A., Outward Bound: A reference volume. Greenwich, Conn.: Outward Bound Inc., 1977.
- 19) 曾我祥子, 日本版 STAIC 標準化の研究, 心理学研究. 1983, 54 (4), 215-221.
- 20) Spielberger, C.D., Axiety, New York Academic Press, 1972.
- 21) Spielberger, C.D., Edward, C.D., Lushene, R.E., Montuori, J., and Platzek, D. STAIC Preliminary Manual for the State-Trait Anxiety Inventory for children ("How I fill questionnaire"). California: Consulting Psychologists Press, Inc., 1973.

- 22) Thornstenson, C.T., Heaps, R.A., & Snow, R. Survival experience on anxiety and hearing sensitivity. *Therapeutic Recreation Journal*, 1975,3, 117-120.
- 23) Wiland, L.J., Vision Quest: Rites of adolescent passage. *Camping Magazine*, 1986, 58 (7), 30-33.

和 文 抄 録

1986年に実施した8日間の冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念の変容を検証することを目的としている。被験者は44名の男女4・5年生から成り、山中での一泊ソロと登山が冒険キャンプのメインプログラムである。

参加者の不安を測定するために、曾我の作成した状態＝特性不安目録 (STAIC) を採用し、キャンプ参加前後を含め5回実施した。本研究では、状態不安尺度だけを用いた。自己概念の測定には梶田の作成した自己成長性検査が用いられ、キャンプ前後の変容を評価した。

本研究の結果、次の結論を得た。

1. 冒険キャンプの参加者は、ソロに最も高い不安を示し、登山はそれに次いだ。
2. すべての場面において、不安の性差はみられなかった。
- 3) 冒険キャンプは参加者の自己概念を向上させる傾向があり、達成動機の要因に関して有意な向上が認められ、特に女子の向上が顕著であった。